

哀菊調教 体験版

肉体関係は一度ではすまなかった。二度三度と身体を重ね、夫のある身でいけないことと思いつつ海藤にのめり込んでいったのは塔子の方だった。若者の固くたくましい男根で荒々しく貫かれる禁断の悦楽は、麻薬のように塔子の女体の隅々まで浸透していった。

「奥さんが好きだ」

強く抱きしめられ、舌を絡め合う濃厚なキスから始まる性行為は、塔子の女体を蕩けさせた。

「奥さんだなんていや・・・塔子と呼んでください」

海藤に舌を吸われた。痺れる感覚が塔子を襲う。

「塔子、好きだ」

塔子が舌を吸った。海藤の指が塔子の乳房をやさしく揉んでくる。乳首が突起しているのがわかった。恥部が熱い。そこに海藤の指が下腹部を滑り降りて到達し、愛撫される。恥毛をかき分けられ、たぎるように熱くなっている潤みに

指がしずむ。

「塔子の前だとすぐに固くなってしまおうよ」

塔子は勃起したペニスを握らされた。

「塔子のせいだよ。何とかしてほしいな」

塔子は、若者の股間に顔を埋めた。口で男根を愛撫する。

舌を使うと、口の中で固くなった男根がはねあがる。

「塔子のものだよ」

塔子は海藤の男根を口で奉仕すると、海藤も塔子の股間に顔を埋めた。舌で舐められた。陰唇を吸われ、膣口を舐められ、クリトリスを吸われた。

「塔子は最高の女だ」

男根に貫かれた。それだけで軽いアクメを迎えた。激しい抽送に塔子は乱れた。喘ぎ声を漏らさないではおれない、セックスだった。

「すごいわ」

性交を終えた直後だというのに、海藤の男根は勃起したままだ。塔子は膣から抜かれたペニスに触れた。

「塔子が魅力的だから、おさまらないのさ。塔子はぼくの女神だよ」

「わたし、いい年をした女よ。女神だなんて」

塔子はペニスを握った。

「塔子は魅力的な女だよ。塔子の大人の魅力に男だったらまいてしまうよ。」

「嘘でもうれしいわ」

「嘘だなんてひどいな。そんなことを言うと、許さないよ」
海藤がのしかかってきた。塔子は若者のたくましいものを迎え入れた。

関係をもって1ヶ月もたつと、娘の美貴が登校した直後に海藤が自宅を訪れるようになっていた。すぐに塔子の身体を求めるのだ。

近所の目があるから毎日のように自宅に来るのはやめると塔子は頼んだが、聞き入れてもらえなかった。塔子自身

も最後まであらがえない弱みがあった。海藤との性交なしの生活は考えられないところまで若者のたくましい男根に溺れていたのだ。

やがて海藤の態度は横柄なものへと変化した。若い女性の影をちらつかせながら塔子を嫉妬させ、

「これに忠誠を誓いなよ」

と隆々と勃起したたくましい男根を突き出すのだ。顔の前に肉棒を突きつけられた塔子は、恥じらいの色を見せながら

「あなたのペニスに忠誠を誓います」

と小さくかすれた声で言い、顔を埋めていく。亀頭を口に含んだだけで、体温は上昇し、子宮はきゅんとせりあがってくる。性的興奮状態に陥っているのは、娘の美貴が登校する前からだった。自宅で抱かれることは近所の目があるからやめてと言っていた塔子だが、今では美貴が登校した直後からの性行為は習慣化しており、たくましい海藤との性交を思うほどに、熟れた女体を熱くしていたのだ。もち

ろん罪悪感は消えることなく塔子を責めていたが、一度知った若者の固い男根で貫かれる悦楽は、塔子の理性を麻痺させていた。

性交は玄関でも、リビングでも、塔子の寝室でも、そして娘の部屋でも行われた。

「塔子、ペニスに忠誠を誓ったのは嘘なのかい」

娘の部屋で性交をすることだけは許してと塔子が懇願すると、海藤は勃起させた男根で塔子のほおを叩きながら

「それならいいさ、このペニスとはもうお別れだな」

海藤はさっさと服を着て立ち去る気配を見せた。塔子はその後ろ姿をじっと見ていたが、もう自分のプライドを貫き通すことができなかった。みじめだと思いつつ、全裸のまま海藤の足下にすがりついてしまった。

「い、いじわるしないで・・・わたしが悪かったわ」

塔子のつぶらな瞳にはうっすらと涙が潤んでいた。

「ペニスに忠誠！」

海藤が向き直る。

「あなたのペニスに忠誠を誓います」

両膝を床につけた塔子は上目づかいで海藤にそう言った。

「ペニス様だろ」

「あなたのペニス様に忠誠を誓います」